

三品泌尿器科医院における1984年から 1990年までの6年6カ月間の外来統計

三品泌尿器科医院
三 品 輝 男

CLINICAL STATISTICS ON OUTPATIENTS AT MISHINA UROLOGICAL OFFICE BETWEEN JULY, 1984 AND DECEMBER, 1990

Teruo Mishina

From the Mishina Urological Office

The total number of outpatients was 6,298. There were 4,293 males and 2,005 females, the male to female ratio being 2.1: 1. The major diseases seen in the outpatients were benign prostatic hypertrophy, bladder dysfunction, chronic prostatitis, prostatic stones, ureteral stones, chronic cystitis, urethral stricture, and essential renal bleeding. The 102 (5.1%) patients with urethral diverticulum among 2,005 female patients were discovered by high pressure urethrography.

There were 373 cases of urogenital malignancies including 205 of bladder tumor, 85 of prostatic carcinoma and 29 of renal tumor, 11 of which were incidentally found. Twenty of the 205 bladder tumors were found among the 703 cases of microhematuria.

(Acta Urol. Jpn. 38: 367-372, 1992)

Key words: Clinical outpatients, Statistics

緒 言

1984年7月4日に泌尿器科医院を開設して以来6年6カ月が経過した。

この間の外来統計を行ったので報告する。

外来患者への対応

外来患者は他医よりの紹介患者と非紹介患者に大別される。紹介患者に対しては、泌尿器科の精密検査による診断および治療方針決定後、紹介医と著者とが共同して治療および経過観察を行う。非紹介患者に対しては、原則として当医院にて治療を行うが、患者の諸種の理由により、近医に治療を依頼することがある。

CT, MRI, アイソトープ検査および血管造影などの特殊検査は、西陣病院、堀川病院、大澤病院あるいは島原病院に、尿路性器悪性腫瘍に対する放射線療法は、京都第二赤十字病院放射線科に、体外衝撃波による上部尿路結石破砕法は西陣病院、武田病院および京都大学附属病院にそれぞれ依頼している。

入院手術を必要とする場合には、当医院に対しセミオープンシステムを採用して頂いている病院に入院の

上、著者が執刀している¹⁾。

外来患者構成

1984年7月4日より1990年12月31日までの6年6カ月における新患患者は男子4,293名、女子2,005名の計6,298名で男女比は2.1 : 1である。新患数の年度別推移はほぼ横ばいで、年間平均969名である。

外来患者の年齢分布をみると、生後2週間から96歳に分布し、そのピークは男子では20歳代(683名)、60歳代(641名)、50歳代(608名)にあるものの、20~70歳代までの各年齢層の患者数はともに多かった。女子においても50歳代(428名)にピークはあるものの、20~70歳代までの各年齢層の患者数はともに多かった。

患者紹介の有無についてみると、6,298名中病院、個人開業医診療所よりの紹介は2,538名で全体の40.3%に達していた。すなわち91病院より1,264名、165個人開業医診療所より1,274名の紹介患者が受診した。

患者の現住所であるが、6,298名中5,337名84.7%が京都府で、うち京都市内は4,630名で全体の73.5%を占めていた。ついで滋賀県564名(9.0%)、

大阪府170名 (2.7%), 兵庫県52名 (0.8%), 奈良県38名 (0.6%), 東京都19名 (0.3%), およびその他118名 (1.9%), となっている。

外来患者疾患部位別観察

臓器別疾患頻度では, 男子では膀胱頸部・前立腺疾患が, 女子では膀胱疾患がもっとも多い。全体としては, 膀胱頸部・前立腺・精囊疾患, 膀胱疾患, 副甲状腺・副腎・腎疾患の順に多い (Table 1)。

疾患別頻度では, 男子では炎症が, 女子では機能異常・尿路閉塞が最も多い。全体としては, 炎症, 機能異常・尿路閉塞, 結石, 良性腫瘍, 形態・位置異常, 奇形, 悪性腫瘍, 外傷, その他の順に多い (Table 2)。

副甲状腺・副腎・腎の疾患は2,028例に認められ, 頻度の高い順に列挙すると, 男子では本態性腎出血, 腎結石症, 腎嚢胞が, 女子では遊走腎, 本態性腎出血, 慢性腎盂腎炎が多い。全体としては, 本態性腎出血443例, 遊走腎310例, 腎結石症265例, 慢性腎盂腎炎258例, 腎嚢胞195例, 水腎症100例, 急性腎盂腎炎61例, 重複腎盂尿管52例, 糸球体腎炎38例, 腎下垂症30例, 腎腫瘍29例などとなっている (Table 3)。

尿管の疾患は648例に認められ, 頻度の高い順に列挙

Table 1. 臓器別疾患頻度 (外来)

臓器名	男	女	計
副甲状腺・副腎・腎	917	1,111	2,028
尿管	458	190	648
膀胱	1,221	1,689	2,910
膀胱頸部・前立腺・精囊	3,856	115	3,971
尿道	398	523	921
性器・その他	1,209	86	1,295
計	8,059	3,714	11,773

Table 2. 疾患別頻度 (外来)

疾患名	男	女	計
悪性腫瘍	282	91	373
良性腫瘍	1,453	73	1,526
炎症	2,182	1,198	3,380
結石	1,468	253	1,721
形態・位置異常	569	403	972
奇形	308	147	455
機能異常・尿路閉塞	1,629	1,488	3,117
外傷	15	10	25
その他	154	50	204
計	8,060	3,713	11,773

Table 3. 副甲状腺・副腎・腎の疾患 (外来)

疾患名	男	女	計
副甲状腺腫瘍	0	2	2
副腎腫瘍	0	1	1
副腎嚢胞	0	1	1
腎腫瘍 (ウイルス腫瘍)	18 (1)	11 (0)	29 (1)
腎盂癌・腎尿管癌	3	4	7
腎嚢胞 (孤立性)	120 (4)	75 (4)	195 (8)
多発性嚢胞腎	6	5	11
重複腎盂尿管 (完全)	23 (5)	29 (11)	52 (16)
馬蹄鉄腎	5	5	10
逆L型腎	0	1	1
融合性骨盤腎	1	0	1
腎位置異常	4	5	9
腎欠損症	1	0	1
腎無形成	1	1	2
矮小腎	6	6	12
海綿腎	6	6	12
腎下垂症	8	22	30
遊走腎	64	246	310
腎杯憩室 (拡張症)	12 (1)	11	23 (1)
急性腎盂腎炎	12	49	61
慢性腎盂腎炎	79	179	258
膿腎症	3	5	8
腎結核 (腎尿管結核)	2	3 (1)	5 (1)
糸球体腎炎 (急性)	22 (4)	16 (3)	38 (7)
腎結石症	172	93	265
腎石灰化症	2	2	4
本態性腎出血	207	236	443
水腎症	64	36	100
腎盂尿管移行部狭窄症	4	4	8
腎不全 (急性)	16 (1)	4	20 (1)
腎性高血圧症	3	5	8
腎内動脈瘤	1	0	1
腎外傷	4	2	6
腎盂自然破裂	1	4	5
その他	47	42	89
計	917	1,111	2,028

すると, 男女ともに尿管結石症が最も多い。全体としては尿管結石症557例, 尿管狭窄21例, 尿管腫瘍17例 (術後2例を含む), 尿管瘤8例, 巨大尿管症および水尿管症各7例などとなっている (Table 4)。

膀胱の疾患は2,910例に認められ, 頻度の高い順に列挙すると, 男子では膀胱機能障害, 膀胱腫瘍, 神経因性膀胱が, 女子では膀胱機能障害, 慢性膀胱炎, 急性膀胱炎が多い。全体としては膀胱機能障害1,251例, 慢性膀胱炎543例, 急性膀胱炎294例, 神経因性膀胱216例, 膀胱腫瘍205例, 膀胱憩室64例, 膀胱結石症57例, 膀胱尿管逆流現象56例, などとなっている (Table 5)。

膀胱頸部・前立腺および精囊の疾患は3,971例に認

められ、頻度の高い順に列挙すると、男子では前立腺肥大症、慢性前立腺炎が、女子では慢性膀胱頸部炎、膀胱頸部硬化症が多い。全体としては前立腺肥大症1,386例、慢性前立腺炎1,183例、前立腺結石症802例、膀胱頸部硬化症293例、慢性膀胱頸部炎94例、前立腺

癌85例、急性前立腺炎67例などとなっている (Table 6)

尿道の疾患は921例に認められ、頻度の高い順に列挙すると、男子では急性尿道炎、慢性尿道炎、尿道狭窄が、女子では尿道狭窄、尿道憩室、尿道息肉が多い。全体としては尿道狭窄400例、慢性尿道炎145例、急性尿道炎141例、尿道憩室104例、尿道息肉61例、尿道腫瘍17例などとなっている (Table 7)。

性器・その他の疾患は1,295例に認められ、頻度の高い順に列挙すると、男子では包茎、亀頭包皮炎が、女子では子宮頸管炎・腔炎が多い。全体としては、包茎408例、亀頭包皮炎206例、精巣上体炎68例、陰囊・

Table 4. 尿管の疾患 (外来)

疾患名	男	女	計
尿管腫瘍	8	7	15
巨大尿管症	3	4	7
水尿管症	2	5	7
尿管狭窄	11	10	21
尿管憩室	1	0	1
下大静脈後尿管	1	0	1
上半腎尿管異所開口	0	1	1
尿管瘤 (異所性)	5 (1)	3	8 (1)
尿管尿道瘻	0	1	1
尿管結石症	413	144	557
尿管完全閉塞 (子宮全摘後)	0	2	2
尿管破裂	1	1	2
その他	13	12	25
計	458	190	648

Table 5. 膀胱の疾患 (外来)

疾患名	男	女	計
膀胱腫瘍 (憩室腫瘍)	140 (1)	61	201 (1)
続発性膀胱癌	1	3	4
膀胱後部腫瘍	1	4	5
膀胱尿管逆流現象	17	39	56
巨大膀胱	1	0	1
膀胱憩室	48	16	64
神経因性膀胱	132	84	216
膀胱機能障害	649	602	1,251
利尿筋括約筋協調不全症	18	6	24
腹圧性尿失禁	2	49	51
遺尿症	4	3	7
夜尿症	22	12	34
膀胱神経症	2	8	10
膀胱刺激症状	0	7	7
急性膀胱炎	41	253	294
慢性膀胱炎 (白板症)	53	490 (101)	543 (101)
間質性膀胱炎 (放射線性)	5 (2)	14 (12)	19 (14)
萎縮膀胱	5	1	6
膀胱結石症	44	13	57
S状結腸膀胱瘻	0	1	1
膀胱膿瘍	0	1	1
膀胱脱	0	1	1
膀胱破裂	0	1	1
膀胱血液タンポナーデ	18	5	23
その他	18	15	33
計	1,221	1,689	2,910

Table 6. 膀胱頸部・前立腺および精囊の疾患 (外来)

疾患名	男	女	計
前立腺癌	85	0	85
前立腺肥大症	1,386	0	1,386
急性前立腺炎	67	0	67
前立腺膿瘍	8	0	8
慢性前立腺炎	1,183	0	1,183
精囊炎 (急性)	15 (1)	0	15 (1)
膀胱頸部硬化症	271	22	293
慢性膀胱頸部炎	2	92	94
前立腺結石症	802	0	802
膀胱頸部結石症	0	1	1
その他	37	0	37
計	3,856	115	3,971

Table 7. 尿道の疾患 (外来)

疾患名	男	女	計
尿道腫瘍 (癌)	13 (6)	4 (3)	17 (9)
外尿道口ページェット病	0	1	1
傍尿道腫瘍	4	0	4
傍尿道嚢胞	4	0	4
尿道息肉	0	61	61
重複尿道	0	1	1
尿道下裂	6	1	7
急性尿道炎	141	0	141
慢性尿道炎	141	4	145
尿道憩室炎	0	10	10
尿道ポリープ	1	0	1
尿道結石症	5	0	5
尿道狭窄	68	332	400
尿道脱	0	5	5
尿道憩室	2	102	104
尿道尖圭コンジローマ	2	0	2
尿道損傷	3	0	3
その他	8	2	10
計	398	523	921

精索水腫68例, 子宮頸管炎・膣炎64例, 包皮結石症30例, 外陰部尖圭コンジローマ28例, 血精液症27例などとなっている (Table 8).

外来小手術および特殊検査は1,257例施行され, 頻度の高い順に列挙すると, 前立腺針生検354件, 経尿道的尿道膀胱生検298件, 包茎手術200件, 経尿道的膀胱内手術198件, 尿道息肉手術53件, 腎嚢胞穿刺術(PNC)34件などとなっている (Table 9).

考 察

A 外来診療システム

Table 8. 性器・その他の疾患 (外来)

疾 患 名	男	女	計
精巣腫瘍 (術後)	14 (5)	0	14 (5)
重複精巣	1	0	1
停留精巣 (移動性)	30 (8)	0	30 (8)
精巣捻転症	5	0	5
類管官症	1	0	1
精 巢 炎	2	0	2
精巣破裂	2	0	2
精巣上体腫瘍	2	0	2
精巣上体嚢腫	1	0	1
精巣上体炎 (急性)	68 (44)	0	68 (44)
精 液 瘤	5	0	5
陰 茎 癌 (術後)	4 (1)	0	4 (1)
転移性陰茎癌	2	0	2
陰茎腫瘍	17	0	17
陰茎湾曲症	2	0	2
包 茎 (真性)	408 (105)	0	408 (105)
嵌頓包茎	7	0	7
陰茎炎症性疾患	5	0	5
成形性陰茎硬結症	2	0	2
亀頭包皮皮炎	206	0	206
包皮結石症	30	0	30
勃起不全	24	0	24
包皮裂傷	2	0	2
精索腫瘍	1	0	1
陰嚢肉芽腫	1	0	1
陰茎前位陰嚢	1	0	1
二分陰嚢	2	0	2
陰嚢・精索水腫 (陰嚢)	68 (52)	0	68 (52)
精索静脈瘤	12	0	12
外陰部尖圭コンジローマ	27	1	28
外陰部ヘルペス	11	3	14
子宮頸管炎・膣炎	0	64	64
鼠径部リンパ腺炎	10	1	11
血精液症	27	0	27
逆行性射精	1	0	1
男子不妊症	32	0	32
鼠径・陰嚢・腹壁ヘルニア	35	2	37
その 他	141	15	156
計	1,209	86	1,295

Table 9. 外来小手術および特殊検査 (外来)

腎嚢胞穿刺術 (PNC)+アルコール固定術	34
経皮的腎盂造影	10
経尿道的膀胱内手術	198
結 石	(48)
凝 血	(53)
異 物	(21)
腫 瘍 (TUR-Bt)	(16)
ステント留置	(8)
経尿道的尿管碎石術 (TUR)	(2)
バスケットカテーテル法	(50)
経尿道的尿道膀胱生検	298
前立腺針生検	354
包茎手術 (真性)	200 (63)
尿道息肉切除術 (尿道脱)	53 (1)
尿道内手術	11
陰茎手術 (コンジローマ)	44 (18)
パイプカット	29
精巣生検・精嚢造影	3
去 勢 術	3
陰嚢水腫根治術	1
その 他	19
計	1,257

泌尿器科専門医院として発足して6年6カ月が経過した。この間91病院, 165診療所より2,538名の患者の紹介を受け, 非紹介患者3,760名とあわせると6年6カ月間の新患者数は6,298名であった。このうち入院手術を必要とする1,211名に対しては, 当医院に対しセミオープンシステムを導入して頂いている京都市, 長岡京市内の11病院の御協力により1,317件の手術を行うことができ, 満足すべき医療が行えた¹⁾。すなわち, 紹介医, 著者, セミオープンシステム病院主治医三者の緊密な連絡により患者にとって満足のゆく医療であったと思われる。

外来診断過程において, 当医院に設置されていないCT, MRI, アイソトープ検査および血管造影を必要とする症例には, 西陣病院, 堀川病院, 大沢病院, 鳥原病院の御協力により, 迅速に(3日以内に)これら診断装置による画像診断が行えた。高度医療診断機器を用いた泌尿器疾患(癌など)の確定診断に要する日時は, 大病院におけるそれと比較しておそらく何分の一かあたり, この診断に要する日時の節約は患者にとっては裨益するところ大と思われる。

結石破碎に対する体外衝撃波治療も, 西陣病院, 武田病院および京都大学医学部附属病院の御協力により行えた。

また尿路性器癌の集学的治療にぜひ必要な放射線治療, 温熱療法も, 京都第二赤十字病院放射線科の御協

力によりスムーズに行えた。

B 疾患

1. 尿潜血反応陽性者・偶発腎細胞癌

近年市民検診，社内検診および学校検診の充実により尿潜血反応陽性者の精密検査が要求されるようになってきた。精査を目的として当医院を6年6カ月間に受診した703名の尿潜血反応陽性者に対し点滴静注性腎盂造影（DIP），腎エコー，腎CTおよび内視鏡検査などの泌尿器科学的検査を積極的に行った結果腎腫瘍1例，尿管腫瘍2例，膀胱腫瘍20例および前立腺癌2例などの尿路性器癌が発見された。なかでも，10代，20代および30代のいずれも女子症例に膀胱腫瘍が発見されたことは特記すべきことであろうと思われる^{2,3)}。

また，まったく無症状で検診もしくは他疾患にて内科通院中に，腹部エコーあるいは腹部CTにより発見されて，当医院に紹介された11例の偶発腎細胞癌がある⁴⁾。これら11症例中10例は早期腎細胞癌（pT1 1例，pT2b 9例，pT3 1例）であった。11例全例に根治的腎全摘除術が施行された。今後はベッドサイドにおける腹部エコーの更なる普及および腹部CTの一般化による偶発腎細胞癌の頻度は増加すると思われる。

2. 女子下部尿路刺激症状

泌尿器科領域における女子下部尿路症状を訴える症例は，女子泌尿器患者の約半数を占める。その症状は，膀胱刺激症状をはじめとして多くの不定愁訴があり，診断に困難をきたす場合がしばしば見られる。これらの症例に対して外尿道口計測，残尿測定，ウロダイナミックス検査，高圧尿道造影，内視鏡などを積極的に行った^{3,5)}。その結果，膀胱機能障害602例，尿道狭窄332例，尿道憩室102例などの多くの疾患が発見され，それぞれの疾患に対して適切な治療が行われた。

欧米では，女性の1.85～4.1%に尿道憩室が認められると報告されているが，本邦においては1987年6月末までは187例が報告されているに過ぎない。当医院では積極的に高圧尿道造影を行った結果，女子2,005例中102例（5.1%）の尿道憩室が発見され⁶⁾，本疾患は欧米の報告と同様，それほど稀な疾患でないことがわかった。

3. 男子排尿障害

男子排尿障害症例に対しても，経直腸的超音波断層法，残尿測定，ウロダイナミックス検査，および尿道膀胱造影などを積極的に行った³⁾。その結果，前立腺肥大症1,386例，慢性前立腺炎1,183例，前立腺結石症802例，膀胱機能障害649例，膀胱頸部硬化症271例，神経因性膀胱132例，前立腺癌85例，尿道狭窄68例お

よび膀胱憩室48例などの貴重な疾患が発見され，それぞれの疾患に対して適切な治療が行えた。

前立腺エコー，ウロダイナミックス検査の普及とともに，患者に苦痛を与える尿道膀胱造影が敬遠されがちであるが，本法を施行しないと確定診断のつき難い尿道狭窄，膀胱頸部硬化症，膀胱憩室，膀胱尿管逆流現象などの多くの疾患もあり，排尿障害症例には依然として不可欠の検査法といえよう。

4. 尿路性器悪性腫瘍

腎腫瘍29例，腎盂癌4例，腎尿管癌3例，尿管腫瘍17例，膀胱腫瘍205例，前立腺癌85例，尿道腫瘍9例，外尿道口ページェット病1例，精巢腫瘍14例，陰茎癌4例および転移性陰茎癌2例，計373例（外来患者の5.9%）の悪性腫瘍が発見され，それぞれに対して適切な治療が行われた。このうちすでに述べた偶発腎細胞癌11例，尿潜血反応陽性者に見られた膀胱腫瘍20例は，画像診断の普及と検診の普及・個々の健康への関心によるものと思われる。

前立腺癌85例の診断は，積極的に前立腺針生検を行った成果と思われる。しかし，針生検も経直腸的前立腺超音波断層像と直腸診を参考にして経会陰的に盲目的に行うものであり，超音波監視下には行っていない。1991年よりは，超音波監視下に生検を行っており，今後はさらに早期の前立腺癌症例が発見されると思われる。

結 語

泌尿器科医院開設後6年6カ月間（1984年7月～1990年12月）の外来統計を報告した。

1) 外来新患者数は6,298名でその内訳は男子4,293名，女子2,005名（男女比2.1:1）であり，うち2,538名（40.3%）が91病院，165診療所よりの紹介であった。

2) 年齢は生後2週間から96歳に分布し，ピークは男子20歳代，女子50歳代にあるものの，男女とも20歳～70歳代の各年齢層の患者数はともに多かった。

3) 外来患者現住所は，京都府5,337名（84.7%），滋賀県564名（9.0%），大阪府170名（2.7%），兵庫県52名（0.8%），奈良県38名（0.6%），およびその他118名（1.9%）となっている。

4) 頻度の高い疾患は前立腺肥大症，膀胱機能障害，慢性前立腺炎，前立腺結石症，尿管結石症，慢性膀胱炎，本態性腎出血，尿道狭窄，などであった。

5) 高圧尿道造影の導入により女子尿道憩室102例（女子患者の5.1%）が診断された。

6) 尿路性器癌は373例（外来総数の5.9%）発見さ

れ、膀胱腫瘍 205 例，前立腺癌85例，腎腫瘍29例などであった。このうち偶発腎細胞癌は11例，尿潜血反応陽性が主訴の膀胱腫瘍は20例であった。

文 献

- 1) 三品輝男：三品泌尿器科医院における1984年から1990年までの6年6カ月間の入院および手術統計 泌尿紀要 **37**：1069-1075, 1991
- 2) 三品輝男：顕微鏡的血尿を主訴とした320症例の臨床的検討。日泌尿会誌 **79**：2246, 1988
- 3) 三品輝男：泌尿器科外来のあり方，泌尿器科治療

ハンドブック。渡辺 汎編，初版 pp. 519-529, 南江堂，東京，1989

- 4) 三品輝男：偶発腎細胞癌11例の検討。日泌尿会誌 **82**：1514, 1991
- 5) 三品輝男：女性下部尿路症状について。日泌尿会誌 **80**：1680-1681, 1989
- 6) 三品輝男，渡辺康介：女子尿道憩室の13例。泌尿紀要 **34**：343-350, 1988

(Received on September 10, 1991)

(Accepted on November 21, 1991)

(迅速掲載)